

までスイソエフカ地区で木材伐採に従事
昭和二十二年十月から昭和二十三年十月末まで木
材貨車積み作業
昭和二十三年十一月 ナホトカより帰国(舞鶴港)
財団全抑協入会現在に至る

(富山県 山田 秀三)

七年間孤独の闘いから生還できて

石川県 蔵 久雄

一、第二の人生のあゆみ

この世に生を受けて私の青春時代もいつしか過ぎ去ってしまいました。

今、七十五歳にして戦後四十数年間の仕事に終止符を打つこととなりました。そしてやっと、心の中にも、肉体にも安らぎができてきました。

これから老人社会の仲間にならざるにいたり、自身のことからの生き方を書き記したいと思いません。

私は子供の頃から小鳥の飼育が好きでした。戦後帰国後、小鳥の鳴き声で目を覚まし、その一日の仕事が始まったものです。その小鳥の鳴き声が仕事への励みと心の支えになっていました。

現在、趣味として色々な鳥を飼っています。カナリヤも多く、雛から成鳥になるまで十カ月かかり、毎日百羽前後の世話で一日が終わってしまう

有様です。仲間も多くできて時々遊びに来て下さいます。東京、大阪各地よりお便りも戴いております。私としては「これで良かった」と毎日、自問自答しています。これからも一人でも多くの仲間を集め、そして、命ある限り趣味として続けていきたいと思っています。

病魔に襲われないよう、そして、家族達にも迷惑をかけないためにもこれが一番良い妙薬であり、いつしか近づく老人ボケ防止の予防の一助となる……と私は確信しているからであります。

私は今、戦後六十年も過ぎてやつとゆとりができた今日、敢えて書き記さねば私自身の心の傷が治まらない思い出が数々あるからです。

それは私個人の歩んできた戦前からの道であり、又、世の人々にせめてもでき得れば伝えておきたい心境があるからであります。そして日本の歴史の片隅にでも思い出させて戴ければ幸いかと願う者の一人であります。

ここ数年間、同級生達が年々、一人、二人とこ

の世を去って逝かれ、戦時中とシベリア抑留中、多くの人達が亡くなられていく様を私は幾度となくこの目で見てまいりました。そんな厳しい他国の地、長かった七年間、よもや生きて帰還できようとは夢にも思いませんでした。

今日、健全な健康状態を保つことができている事は、これもひとえに神仏の加護があればこそ！と私は心から神仏を信ずる者の一人となりました。

二、召集と衛生教育

記憶が薄れたとはいえ、顧みるに私が召集命を受けたのは、徴兵工として「新潟県二本木、日本曹達工場」の一年目、昭和十七（一九四二）年五月であった。東部四十九部隊、現在の石川県金沢市金沢城址に衛生兵として入隊しました。それが、長く感じた七年間の私の孤独との闘いの始まりです。

石川県、長野県の混合部隊で約四十人でした。

翌日から衛生教育の第一歩が始まりました。当時、教育場所は金沢市出羽町国立病院の向こう側に仮

兵舎があり、毎日通ったものです。

その頃、南方方面の戦況も玉砕の報を度々耳にしました。衛生教育、歩兵教育も交えて非常に厳しいものでした。幾度三八式歩兵銃を肩に実弾射撃場へ通ったことか。金沢市の小立野の松林の中にあつたことが思い出されず。

私達の兵舎の後方の小高い所に高射砲が配置されていたことも思い出されます。幾日か過ぎて時折、小・中隊の兵士達が夕暮れ時出発して行かれるのを兵舎から見ることができました。

私達もいざ行かねばならない時がくると戦友と話し合ったものです。入隊して三カ月、私達も出発を命ぜられた。約二十人程であつた。

金沢駅の前には他の部隊の兵士達が集まっていた。出発したのは真夜中の汽車でした。真つ暗闇で外を見ることができなかった。以前私達が小旗を振り出征兵士を支那事変当時幾度か見送った故郷、そのあたりを心の中に思い浮かべている間にいつしか通り過ぎて行つた。

下関から輸送船で釜山に翌日到着しました。多くの兵士たちが下船したが、私達だけが北満行きをそこで聞かされた。軍用列車は朝鮮半島も過ぎて北へ北へと走っていた。途中他の部隊も所々で下車して、我々だけがこの列車で目的地に向かつていた。満州の夕陽は赤くきれいに見えた。目的地に着いたのは夕陽も落ちてからであつた。月夜が幸いして、道路を境に沼地と森林地帯を約一時間程歩いて目的地の部隊に着くことができた。北満黒河省瓊瑋陣地であつた。そこに我々の部隊があつた。部隊名も「瓊瑋陸軍兵站病院」と名づけられていた。兵站病院とは開戦して初めて開設する病院部隊である。それが我々の任務であると聞かされていた。

この陣地には、歩兵部隊、高射砲部隊、戦車部隊と多く散在していると聞かされた。

我々の部隊は患者のいない病院だから、毎日朝から第二回目の衛生教育が始まつた。部隊内は隊長以下軍医二人外、下士官三人、古年兵十人ほど

でした。古年兵はいつしか他の部隊に編入されたのか、顔を合わせる事はなかった。非常に少ない人数でした。

一カ月過ぎて秋も深まったある日、当陣地内全部隊の合同行事が行われた。我々も参加させられた。満州事変当時設置された鉄道沿いを中心に、黒龍江河岸沿いに対ソ戦を想定して行われた。双眼鏡でソ連兵が良く見えるところでもあった。又、この鉄道は河岸五メートル程の所で切断されていた。満州事変当時、シベリアに通じるためにできた一部で名残でもあった。ここは最北端で黒河という所でもあった。近くに病院、兵舎等散在するが、兵士達はすでに南方へ移動したことを聞かされていた。

野営も非常に寒くて眠れなかった。演習も二日間ですべて終わってほっとしたものだ。秋といえば北満には早く冬が来る事を体験した。一度の降雪で一面は真っ白く凍りつくのであった。夜間営兵勤務も週一回廻ってくる。防寒具を着けていても寒さ

は肌まで通じる。足踏みをしながら、そして、好きであった歌「あゝわが戦友」など口ずさんで交替時間を待っていたものだ。

満目百里雪白く

広表山河風あれて

枯木に宿る鳥もなく

ただ 上弦の月蒼し

林柳波 作詞

細川潤一 作曲

この兵站病院の部隊には同郷の方、軍医を含めて三十三人おられたと聞いていたが、名前も住所も聞かれず、今になって残念でならない。

翌年ようやく春も近い三月、私達の中から五人指名されて、新京蒙家屯の衛生教育隊に行くことが命ぜられた。各満州部隊から集まった者は六十人程度でした。私は入隊以来三回目の衛生教育になる。勿論、基礎教育を徹底して非常に厳しいものであった。週何回か歩兵教育もあり、夜間行軍も度々行わされた。又、死を覚悟の対戦車箱爆雷

を抱えて戦車に飛び込む練習もあった。六カ月の厳しかった教育もやっと終わった。しかしながらこの期間、五尺三寸足らずの身体がよく持ちこたえてくれたと、我ながら不思議でならなかった。右の耳で聞いて左の耳へ抜けていくような教育でもあった。今になっても脳裏に残っていて忘れないう事は法定伝染病の覚え方ぐらいかもしれないし、これが六カ月の成果とも言える。

【虎の赤腸。バラと発す昇江実。に紅なり】

【鼠 逃走 脳炎】

法定伝染病として現在も変わりがないと思う。

つまり病名は、ペスト、コレラ、赤痢、腸チフス、パラチフス、発疹チフス、ジフテリア、猩紅熱、疱疹、流行性脳脊髄膜炎、日本脳炎のことである。

九月、原隊に帰ることになった。最初の曖昧陸軍病院は閉鎖されていたため、曖昧陸軍病院に事情を話してそこで勤務することになった。曖昧陸軍地各部隊は北満には開戦がないから南の方へ移動

されて行った！ との事であった。その日から私は班長を命ぜられ、更にびっくりしたものだ。班員の兵士達はなんと私より年上の三十人であった。二カ月前に召集を受けて送り込まれたそうである。日本国内は今どうなっているのだろうか？ もう若い者達は一人もいなくなつたのではなからうか？ そんなことを初めて痛感した。幸いに病院には五人程看護婦さんがおられ、彼女達を勤務を通じて衛生教育を教えられた事が思い出されます。戦後、彼女達はこの北満の地から無事に帰られたことを祈りたい。この病院には兵士たち約八十人程入院されていた。私も週二回程夜間勤務があった。伝染病室だから病名不明の人達や重病人が多かった。幾度か教育を受けて来たといえ、やはり心細かった。そして夜勤の日に限って世を去って行かれる幾十人の死体を見送ったことか。この人たちは戦病死として内地に報告されたであろうか。又、回復された患者さんも多くおられた。

昭和二十年三月、私一人が元氣になられた人達

の輸送責任を命ぜられた。行き先は旅順の陸軍病院である。朝食後軍用列車で約四十人程であったと思う。軍用列車であるから北から南まで一日で着いてしまう。患者輸送の責任も終えてほっとしたものだ。宿舎は大連にあると予め聞いていたので大連で下車し、地図を頼りに探したが分からず淋しい思いをしたものだ。

道行く方に尋ねたが、「夜間だからむずかしい」と言われた。だが、日本人の方でしたので「私の家に泊まりなさい」と言ってくれました。私はその厚意に甘えて泊めてもらうことにした。その夜は責任感と緊張感はどこへ、ぐっすり眠ることができた。翌朝一番列車で行けば夜北満に着くことも教えていただきました。金銭も取ってくださいませんでした。私はタバコ「旭光」二個を渡してその家を後にしました。大変喜んでくださり、「元気でいてね」と言われ涙が出るのをこらえた。私が今も忘れられない人生の一頁であります。そして原隊に無事帰ることができました。今も忘れら

れない。

休む間もなく二日後、ハルピン七三一部隊の分院へ編入命令であった。目的は北満防疫給水部隊編成準備の教育であった。私としては入隊以来第四回目の衛生教育に入ったわけです。ハルピンで下車し、私一人が目的地を向いて歩きました。左にハルピン陸軍病院があり、右方にロシア人墓地があつたのが思い出されます。夕暮れ時であつたので淋しい思いがしたものです。どうにか部隊に着くことができました。各部隊から集まった兵士は二十人であつた。中には以前、新京教育隊の同年兵が三人もいたので心強かった。分院には患者三十人程入院されていた。患者はチフス菌保有者であるが発病しない患者である。

私達の兵舎は分隊とは十メートル程離れて教育場所、実験室も隣にあつた。

毎日、細菌培養の仕事であつた。種々の菌を覗いたが、コレラ菌が飛び回るのを初めて見て驚いた。給水部隊であるから時々、濾過器で川の水を

飲まされた。倉庫には幾台か並んでいたことも思
い出されます。時々、石井部隊の本隊に勤務する
現地人の検便も行わされた。

帰国後、石井部隊は細菌戦を実行したと聞いて
驚いた。分院の患者達は終戦後無事に帰られたで
あろうか。気がかりで忘れられない。

約三カ月たって教育も終わって暖璋病院に帰っ
た。それから間もなく八月十二日であったと思う、
北満防疫給水部隊編成のため、また私一人が孫呉
陸軍病院に行くこととなった。

孫呉陸軍病院には暖璋病院から列車で一時間程
乗って着いた。いよいよ新しい部隊、防疫給水部
隊ができると思った。部隊長は一、二日中に集結
すると伝えられた。しかし幸か不幸か、その翌日
の朝、ソ連参戦が伝えられた。

私は隊長に原隊へ行くように言われた。孫呉陣
地に集結するからそこへ行くように言われた。隊
長はすでにその事を知っていたのである。また私
一人が淋しく陣地の方向にひたすら歩いたものだ。

途中どこからともなく少数ながら同じ方向へ来る
兵隊達があった。ひとまず心強かった。陣地は小
高い森林にあった。所々に兵士の姿も見える。し
ばらく陣地内を歩いて原隊の兵士に会うことがで
きた、皆が喜んで迎えてくれて非常にうれしい思
い出がある。彼らは昨夜一睡もせず三十分前に着
いたと聞き、大変だったと思う。

とにかく防空壕を掘った。その夜はどこからと
もなく爆音が聞こえた。それ程心配もせず仮眠を
とった。翌朝からソ連機が高度を旋回し始めた。
夕暮れ時から爆弾を数力所落としていく。機関砲
の葉莢が私達の前後にばらばらと落ちてくる。大
木の陰に隠れるのに精いっぱいでした。陣地から
対抗する兵器はすでに無かったのではなかるうか
…。ソ連機が三機、時折上空を旋回してくるが、
高度のためか爆弾は落とさず去って行く。やれや
れと胸を撫で下ろしたものだ。

陣地から見る暗闇の孫呉の村町家等が黒煙を上
げて燃えているのが見えた。陣地とはいえ、夜間

はどこからともなく銃声が聞こえてくるし、いつソ連戦車が上ってくるかと思うと眠れなかった。翌朝、負傷者がいないか、私の分隊が見て回るようになった。所々に昨日爆弾が落ちた場所に大小の穴があいていた。馬も数頭倒れていた。

翌朝、早くにソ連の双発機がゆつくりと旋回していく。誰ともなく「戦争は昨日で終わった」と話している。そして、孫呉陣地を後にして山を降りた。厳しく長かった軍隊生活もこれで終わり、と嬉しく思ったものだ。毎日毎日我が故郷 日本 の地に帰れる日を夢見て待った。数日して集合がかかった。雑嚢を整理した。クレオソート、アスピリン、後で内地に着くまで何かのためと大事にしまつて入れた。出発した時からすでに内地の事、親戚の事など色々思い浮かべながら、黙々と勇気を出して歩いたものだった。数時間歩いて途中、変だなーと思った事に気がついた。

それは、満州鉄道を渡ってからである。日本に帰るなら汽車が早いのに、北へ北へと荒野を歩い

ているからだ。マンドリン銃を肩にかけたソ連兵士が時折私達の横を歩きながら見張っているようだ。我々の行動が一つ一つ変に思ったのであろうか。数時間たつて、その夜は雨でした。

携帯用の小さなテントを張り野原に寝ることに なった。翌朝誰かが焚き火を始めた。雨で湿ったものを干した。朝食はなかった。終戦後山から降り、毎日一食が当たり前になっていたのでそれほど苦にはならなかった。しかし、空腹であった。数時間歩いて着いた所は黒河の河岸であった。そこには大きな貨物船が横たわっていた。私達が以前、軍で歩いた所だと思ひ出された。船はわずかな時間で対岸ソ連領に着いて、また歩き始めた。それでもまだ半信半疑で内地への希望を捨てきれなかった。黙々と歩くこと数時間、赤い太陽も沈む頃着いた所は、なんと入り口に【第十九捕虜収容所】と大きく書いてあるではないか。私達は呆然とし、帰国の夢もここで消えてしまった。ソ連領に近い北満にいたから私達が第一陣の入所であ

った。

三、抑留生活

私が入所していた捕虜收容所は元ソ連の兵舎の跡らしい。所々に古びた倉庫が散在している。第一陣として私達約百人がその汚れた兵舎に入れられた。入り口に数人のソ連兵が銃を構えて睨んでいる。空腹と疲労で誰一人声を出す者もないようだ。その夜は肩と肩とを寄せ合って寝ることとなった。が、南京虫の襲撃に遭う。翌日、藁交じりの黒パン一切れが分配された。牛か馬の食べる餌のような物であった。それでも私達は無理して喉に入れた。

その日、私物検査も行われた。クレオソートとアスピリンの少量入ったビンを隠し持つことができた。後日、非常に役に立つこととなった。検査後何一つ残っていないかかったのにびっくりした。靴下、手袋等無理して持ってきたのに、毛布は勿論、水筒、飯盒までも……。その夜は毛布が各人に一

枚ずつ渡された。我々はやれやれと思った。日増しに收容所に入所してくる人達が多くなってきた。いつの間にか收容所の囲いも鉄線が張りめぐらされた。監視所もできて、夜はライトが收容所を照らしている。刑務所そのものである。

ああ、私達は受刑者にいつしかなっていたのだ。数日して私達数十人が炭坑へ狩り出される。出発時の点呼も中々進まない。何べんも人数を数える。時間がかかった。第一日目は二時間程で仕事が終わったが、体力がなかった。くたくたになった。同時にコルホーズに行った同僚達が帰って来た。大きな馬鈴薯を半焼きであったが一個くれた。嬉しかった事が思い出される。シベリアの冬も早くやってきた。炭坑労働には、もう防寒具を身に着けなければ外に立っていることはできない状態であった。それでも毎日数時間働かされた。数日経ったある日、通訳を通じて、收容所内に病院ができる事となり衛生兵を募った。私は一番先に志願した。仲間達もそうであるように、炭坑労働

働には体力が限界であった。当時、五尺三寸の身長に四十数キロと小さい身体を、今にして思えば収容所生活四年間を支えてくれたのは神仏の加護があつたからではなからうか？ と信じている者です。そして、医療経験者が七人集まつた。

病院となる部屋は勿論汚れた兵舎であつた。朝から夜まで一日中掃除で終わった。鉄製の二段ベツドも運び込まれた。どうにか病室らしくなってきた。しかしながらレントゲン室や薬室は未だにできていなかった。ソ連医師二人、看護婦二人が私達に色々と指示することとなつた。四、五日して日本医師も二人来られた。収容所にどこからともなく集まつた人達は一千人程に達した。病院も忙しくなつてきた。毎日五人、十人と入院してくる。約一カ月程で病室が満杯となる。患者さんは栄養失調と高熱者ばかりだ。私達の仕事はタオルで頭部を冷やすことであつた。院内には患者食を作る炊事場もできた。素人の同僚がわずかな米、パンで患者食を作つた。私達はわずか良い雑炊で

あつた。毎日朝、通訳と医師が回診する。指示といえは頭を冷やす事と、葉は熱冷ましたと言つて白い錠剤を一つ与えられた。診察も漠然としたものであつた。薬物は何も準備されていない。毎日のように患者が増えてくる。病院も満杯になつた。数日してやつとリングルが数本入つてきた。必要な患者に行き渡るはずはなかつた。私達はせめてもと思ひ、一本の半分ずつ注射して回つた。ともかくも同僚達はかけずり回り患者たちの手当てに忙しかつた。

患者食や少量の薬品が来たとはいへ、既に遅かつたのでなからうか？ 毎日のように亡くなつていかれる同胞たちの屍を見送らねばならない。私達の気持ち、誰に伝えたらよいか、ただ合掌して見送るだけであつた。

ほとんど栄養失調であろう、痩せられていた。熱の下がらない肺炎患者もおられた。私が持つていたアスピリンで熱が下がつた方もあり、非常に嬉しかつた。

朝夕の配膳も忙しい労働の一つでした。食欲のない患者も多く、又、わずかの量も口にするのでできない人達には何度無理に口に入れてあげたことか。医師には食糧とか薬物の量とかを色々願ったが全く無理であった。同僚たちの労働も昼夜と働き、もうくたくたであった。限界にきている。医師とどれだけ口争いをしたことか、これも無理であった。同僚達と譲り合い、その日その日を過ごした。それでも毎日のように満足に食事、薬も口にする事なく故郷の地を踏まれない人たちがいる。そして、ようやく収容所内に食堂ができた。私も何よりここへ通うのが待ちきれない楽しみであった。少量のパンと雑炊であった。キャベツの粗い葉っぱが以前より多く入っている。そして、温かいのが何よりであった。栄養価があるものであろうか？ 疑問であった。収容所に人数も増すにつれてソ連の政治部員、日本人関係と民主教育が始まった。それから毎日のようにソ連政治部員が私達の行動を監視しているように思えてなら

なかった。ある日煙草の配給があつて、中にお茶の葉が混じっていた。皆が煙草と交えて吸っていた。私はお茶として飲んだが、故郷が思い出されてならなかった。幾日か過ぎて日本女性の方が勤務に八人來られた。私達は「助かった！」と、ほつとしたものだ。実際に看護婦さんは三人しかおられなかった。でも、献身的に患者の世話を進んで行われていた。頭の下がる思いがしたし、患者自身も命拾いをした。笑顔が絶えなかった事が思い出される。帰国後、達者でおられることを祈りたい。

ある日、春とはいえまだ寒い日であった。ソ連医師から死体解剖をするよう言われ寒気がした。誰か代わりに……と思つたが言えなかった。仕方なく行つた。医師は数分間、指で触り、終わった。私は南無阿弥陀仏を唱え、凍りついた死体を縫合して終わった。その日の夕食は口に入らなかった。夜は亡くなられた人々が思い浮かんで眠れなかった。それから数日ごとに一体、二体と解剖を行わ

された。戦時中、北満病院で幾度か手伝ったことがあったから苦労はなかったが……。私は誰にも話さなかったが知っている同僚がいたようであった。一、二年を過ぎてからであろうか、通訳を通じて私に死体解剖立会人としてサインが命ぜられた。何十通もあったのではなからうか。反発する間もなく終わったことが疑問でならない。

収容所生活もいつの間にか四年目を迎えて食糧事情と薬品も以前より多く、患者たちも元気になるてきた。そして五月、夕食後、日本へ帰ることを伝えられる。夕食の食堂には我々だけであった。食後、私物検査が行われた。大事にしていた手帳を渡さなければならなかった。友人の住所、名前等多く書き込んでいた大切な物であった。残念でならなかった。当時としては、諦めねば帰国ができなかつたからである。

私達と患者、そして残務に当たっておられた方、合わせて約五十人、この収容所を最後に出発した。長い冬期、短い真夏の暑さ、よくぞ我が身が耐え

抜いてこられたものだ。四年間の収容生活もこれで終符かと思うと、ひとりでに涙も落ちた。この収容所におられた数千人以上の方々もいつしか帰国されていた。

帰国にあたり、四年間の土産物は古ぼけた軍服と軍帽であった。そして、大切な命を持って帰れることは何よりであると思つた。

この数年間、戦争とは死出の道であり、人類の滅亡であることをつくづく知つた。暗くなつて貨車に乗せられ東へと出発した。ハバロフスクを過ぎて翌朝ナホトカに着いた。海水の匂いが鼻につく。忘れかけていた故郷の匂いであつた。勇気百倍、生かされていてよかつたと今更のように思つた。

翌朝「第一大拓丸」と書かれた貨物船が棧橋に横付けになつていた。私達はそれに乗船して舞鶴港へと向かつた。